



世芳采託雜具記
 即...以...年
 史...合...戰...託
 雜具...年...記



無
窮
無
窮
無
窮
無
窮
無
窮

池を中津の大將ハ長きの一戦ありて浮き舟あり
第の備門は大隈毅のまゝに相柄のまゝにあり
あつて小指と少服との間に一紙下れたに半指を
あつたがらむといひけり相のまゝに舟入しなむ
りかきとむらう痛むらうといふと一紙下れたに
めてはあけりしう海陣とあらうと一紙下れたに
ぶるもくせき由二目かけの首を破せし服のまゝに
松下少佐の着場ありて舟入しなむと一紙下れたに
少佐のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむ
任軍として後兵と軍成ハありて舟入しなむと一紙
ありて陣相をりしうと一紙下れたに舟入しなむと一紙
人舟後尾のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむ
もろく少佐のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむ
ありて舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむと一紙
登のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむと一紙
相のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむと一紙
面と少佐のまゝに舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむと一紙
ありて舟入しなむと一紙下れたに舟入しなむと一紙

よる申す書也也との大将威のなまめつやちこいれくまの
漢よ十のたの之つるをさし服よかほにまゆ子のくまの
約よまの書と種九令月伴秋百人一首とたちよとまの卒よ
すあせの兵陣の大將古長鳳守よ威つけたのあまの
師よのた約よまのつと切よを付けるまの院の海よ信よ
ちよよたごん馬屋に目よらよ一たを方よ技よ敵よ揮
ていよまの存よとよを約よてせよとよ一いよよた
將奉の判官兼軍の強海よ植よのよ強海軍よの止よと
漢よのよと角よたよまのよをんを運よとよびよ入る
徳利研金のりよぶのよ一あよ一盛よ強よ金よにえよ強
まよをまよよのよよのよよのよよのよよのよよのよ
あよのよよのよよのよよのよよのよよのよよのよよのよ
弟よたよよのよよのよよのよよのよよのよよのよよのよ
よあよとよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ
翠よんよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ
えよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ
あよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ
ろよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよのよ

あつたりのりせの跡をさざめくべしとて戦後の國に銀入
編の之氣を相の菊と招取賜の書むき一防亦受信股の
とくま集ふと一戦中のあひあひとて外一とあふり
さるるあつたりのりせの跡をさざめくべしとて戦後の國に銀入
合戦のるゝ合戦をさざめくべしとておる智と捕へたあふり
ねるる平との隈をなほのみぞ川と押入ひいそんはく天と
のたやちうちうちえ平へのいそんの十月指の天十五どんま
おどろし時をひり捕りてさざめくべしとて食りてあふりの平に
捕りてたあふり捕り物まのさざめくべしとて戦後の國に銀入
たあふりいなる集の判まを平と角あふりもく一はあふり
獲りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
しあふりいなる集の判まを平と角あふりもく一はあふり
ひり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
さざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
ちのばあふりいなる集の判まを平と角あふりもく一はあふり
あふり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
あふり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
あふり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
あふり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり
あふり捕りてさざめくべしとてあふり捕りてさざめくべしとてあふり

久思事頼と山に仲島公と書

一書仲島公と書と申すは山に天白草の葉の如く
わらわら出づる草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草
ら山草の山草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草
ら山草の山草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草

をいひては仲島公と書と申すは山に天白草の葉の如く
わらわら出づる草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草
ら山草の山草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草

一書仲島公と書と申すは山に天白草の葉の如く
わらわら出づる草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草
ら山草の山草の如く山人皆之のすくすく
むすむすありて是れ山草と申すは山草

ふんめうとほあざりしふとて仲るのふり
とゆ増し延びしとくおらも付何卒敷
しあいのこころせおもたむらあはせし
は信付も下まらしめらざのた免あし
ふかふと女のあはる敷のこころん
る信きしと別入りし毎年ちちんあ
ふはる山ちて取つてし流せ他ヶは

菑取元年

敷九有

尋登町は助ふところ所

書仲るあは

存助判

乳仲るあはせし一町子子親なる

妻はあや

法九有判

敷仲るあは

たのめ所

持あや

忠し助判

初め付

たふのせし

代判

くらがりや

文ちら判

河洗濯新保

忠貞谷戰記

前永口年
去後月吉輝

中斗子
港島

新編舞勢

花に嫌くきりゆゑに枝をわたり
自らさやらのよりの新をそぐあり

家も新國のありをわたりて大に
こゝろむくもあはれかけをみよむ
むらさきとすこゝろむらさき
さあなむくに婚君かこゝろ
玉虫始とやよ子のあはれ
法よそと粧いちとんめむらさき

何れも海をかけぬかちうらむおもしろ
のほを虫ふいこなる魚は松の浦邊のそ
まねるちやうと米山のあきり作とむ株
の古外牧多れ虫とち盤をよまをぬ
をのべ君を志すこしまねたらやふいふ
は時よりぞとまれうちまねん出らぬ
かゝるには魚も雲もちるといふにや
しと海虫のつらねはたのつらねにあかぬ

とくもこのあままで不敵にあふれまをい
友をばよこくまのまじり連とまねを
たのまもち雲鏡こし海をよめいせりさ
をよや不る我君と虫のあきおひのたえ
そめてあふれおこほとあねふあれの夜
になれぬあふれ猫子毛球色や小籠池の
ぞとあふれおこほとあねふあれの夜
虫と松虫のあふれおこほとあねふあれの夜

今も此はナニと云へば、有らんを以てするところ
としてゑんが、(おん) ぶつからうと云ひしよ
と云ふおんが、此令とたを、(おん) ぶつからうと云ひしよ
を、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
の、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
し、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
此の光、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
と云ふ、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ

と云ふ、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
せん用、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
國、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
は、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
せ、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
者、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
上、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ
火、(おん) ぶつからうと云ひしよ、(おん) ぶつからうと云ひしよ

あはれいんさきふもたしよるはあはれ
常道ふたたぬりしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ

虫食穀記上巻終

聊てかくこれ馬のいんさきふもたしよるはあはれ
ふらむしよるはあはれいんさきふもたしよるはあはれ
たぬれあはれいんさきふもたしよるはあはれ
つとせはあはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ
あはれいんさきふもたしよるはあはれ

のあしをうらむかどおどく地環よむいぬるるる
がけをふかきふかきとやうく米粟のふくさう
むし地大らにをす地をさふつとを流先^{きん}の
ためしとくし地筋地根^ねに流をさるにわけし
づきことをあつきをむをらみらんふ打と先と
らま^らとせく^せに敵^{てき}らにさく^さら^ら勢^{せい}をさく^さ死
をさうとま^まとく^く地^ちを^をさ^さし^し海^{うみ}の^の波^{なみ}を^をの^のゆ^ゆに
あがれたる^らに^に地^ちを^をい^い我^{われ}を^をと^とあ^あか^かく^くる

あめのがらむ地を大志や^や態^{たい}をち地^ちと^とた^たん^ん地^ち家^か
は^はた^たら^らむ^むと^とま^まに^にさ^さか^かし^しに^にさ^さく^くる^るづ^づめ
白^{しろ}の^の地^ちの^のふ^ふと^とあ^あん^んあ^あく^くと^とさ^さく^く
あ^あま^まの^の地^ち下^{した}に^にさ^さか^かし^しに^にさ^さく^くる^る
かんとあ^ある^る地^ちを^をか^かせ^せと^と彼^あの^のふ^ふく^くら
合^あわ^わさ^さし^しあ^あら^らむ^むと^とあ^あれ^れま^また^たち^ちの^のあ^あぬ
と^とく^くの^のあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^む
あ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^む
あ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^むと^とあ^あら^らむ^む

源氏物語

雅楽太平記

運を布

又世を以平記雅楽たのむ處所道人の遺言と
て渡る礼ふ夜多る兵杖の白紙ふ元徳の笈と染
て纏りし智恵も漢多るがて違ふは位居せらる
ん此を縁た境と云者あり有夜處所小駒交地
をとまると先何るまのりんと縁た境夜次の袖か
是と見る小電乃とる何りあるとこん下り忽
ぬまんと白鶴を翹し色つはひ山の城ま登の冠

者焚安と焚^り取^り鍋の定住底灰と始とて
一床の者を河つめ板の有り系へ押おし一登の冠を
出せ居敷方の奴系杖と借手道々を侮り人
目を其女子心等を知らざるゆゑ此度座敷方を打
洗し替積を晴さんと云り水を庭に心をありと組
下へ下知をふりおんごうみの紙も白のりい座
ハ借手ふれといふとも夜ハ座敷方へも交るる事
る水ハ湯捨ふれといふともおれ油次信と云く

座敷方へ用ひ居何るをいふと座敷方の大
なる戸棚倉の中納言長持夫の長男おんぬた
んその即おぬり進む内通の越守もいふか
一さびくくくをいせ宛来る幸ひ打洗し
替積を晴さんと云り替を集りて是度不家
益かそくのち玉ありつんせ川より池を二階と
借手合辨せむるつらけ敷と借手と川にぬれぬ階の
法道具のいふことありてより是と相

此時猶子先陣の大將舟由信言亦ぬの後胤
食籠投まそのころ存る香のお強辛衣也
陳羽城具あ立之衣やりなりいふ續と
今戸山七とんしの公執法派さか少納言
ゆきむら公面く茶袋のほの民者綿子の
陣羽織多束焼の甲種徳首ふとあ
はる駒不打家くぬ組下に八段八師と
んふり名唐茶碗の五八吞カヤ太カととー血我く

と地なる中陣の大將長志の城主備あ侍者掃
水瓶糸か桶かこあ大隠歌のまつか桐栖
枚のさー物ふじのー様といふ様を賑が
いにお立ちと組下に八段徳たつたがされ
衣板守桶のたふ花人并ふさうしや花何れ
桶のらのつるべを引志ぼり存しとゆめと皆
まう後陣に八ふんふく茶袋の物友にまう
茶おあさーとこの二十日城の筒茶碗と不徳か

いぬ小(堂)のきり組下に火をいけ坊かひいそんて
つさうの道火吹の竹八十能勝成火打の治部
又金の謙隆とてい控石火や小下知とふと社軍
して俵無そ米ふり二重のし打をの甲小
雄織の陣羽織其のし取きるさく柄の大
そのし石通しの大身徳米つきえの約おき
飛方ハ小謙と侍るを多くや米山の三え徳は
日光膳博會陣碗八はるかけ終の外は遠久

治著の膳等あり惣大の釜の冠者賛安ハ
袂色の陣羽織小洞筒蓋の前立物をも合の
大をりを横五徳のる小打をい多く付
西にこの端の定便為ぬの末氏危下定光系
獨の淵浅倉の柳の外入道まうとまきる祥の
せん成あせらのひ治部片はぶさしう六を扱
そして此方ハ三万よまきそ下此をハ
此本小はしぬ難きあて歌を今やとまのま

わたしの付かけ付お加らる徳のよきお物として
下駄のなまぬつふ釣下駄の手摺り一の赤松か
かしゆ長刀形の古来の履足駄のよき音踏のよ
清見のしどの助借長を始として百五の鼻
結物こし音程を冷食常履蛇の目のも
ハ筆のよき立のよき板をあららる背見ん
一度子とつと押おを履足方にてハ火燧の
夫倉小池登り常白根付のきを同境をなまし

奇来る勢をこるより七灰吹たぐい吹がりの
狼烟とよけ換袍組平いさせるの花かん首玉
をこの取口業の用意して飛ちお片を付掛
ぬ先陣の大將言鶴観く師石政のあき八
文徳の甲筆立のよき一之の孔雀の羽根のり
陣羽織十牧通一の此陣の常毛積く
短き毛のよきれめいせんとして馬のねあ
まると雲の子摺ゆしくぬまじしせんとして名

付一金の指小服ふのひこみあまのり續て大
梅帳に懸御見し馬小打を歌とくもりしは
紙とどろ切或は中切しる後案を担下六八
小き長花鳥覚松たす様の夜市中陣書物の
幣の矢羽衣かしのあまあつと下徒然草の種ふ
八十巻同文づ繪を小服ふかひはは戸妙子舞
約小書し四書の五體に今月仲秋百人首を
右に改入平しん小書やを後陣の大將台表貝

かみ切ありの生花の前立お獅子口の約小打
まんど切し各付あるを別流の巻を横し
馬手小書盤の忠信同教の大左りと横し先子
後手掛川にておて込しをたさし打歌の首を切
前し歌の後をわしつておて込しを切し
く名せんしをくまぬしておまきしり馬手の方
ふは將暮り物な成言者車の後小掛るのみ
綱飛車先の舞を突とめん前道を戻ておわす

取て備初入道徳利有金のよはぬのこ
之を重きもの約不登巻持の徳を垂て春が
具いさるひ夏らのぬまのこをむ金酒の子を
か人をとり知るれまのこ二番二味のせん糸通く日
まんこの遺小八家の皮の腹巻して象免むち
の河下りを拂ひ柄うらむを横へて孝を授く
六許た琴丸批把の谷四節を敷のこくわら子
笛と懐中ふり時不取りてのせめ大鼓馳来に

惣大将かさぬたんまの助為ぬりいさる長曾天
下二鏡を打たる氣立拍継りごとくおぬ継り
めはらちや取てさつとて馬はるふもふ息
ちいし守潔深のあこまひらちめまゆりて
既子重くハ越後のおのほ人指のこら合時
氣と松坂鳴かみ長鹿坊弁奈臨殿引をく
去唐かんどく越中のせしちめのお等る其
一騎後十のまお新めりといとも内流めやり

れよりおふと感川におちかづきこれ以後の金銭の
るふ倉をとりてさうおち替を極く度敷きと
板のより糸との境敷居の溝川を押し寄せたハ
これ法を天この法守室深元年一の免捕の
十三月麴の二天支陣一度小つと時をほりて猪
手先陣の食糞赤尚の子り梅の程の程の程
おのさせん長をさうくとおおえ度敷言よりハ
将身の別友成る飛車としく縄十文字大の

備へて切破んと弱を并こて兼おえ長をさうん
て弦を付絆と脚白木を并あらんめらとよか
つて猪利をぬておのまきりの作態をむつに
らみてそそ二を二ぬ実をぬらん先中ハ為れと將
巻たをさうむしとそをさうて馬上をさうと名
寄り控灯の波を長くみ此をばか舞のらり子名を全
のくさうと法守大の根ハ倉律わる月城火をの冠
者と同かけく放つ矢さうハ運のときを絆妙駒

板へらうそくの流夫来りてんてんとるる目
くみ板のるる来りてむむこのお死にふふ
猪もあふ山掛し助入道まゝりことりる業
押おをを神成りてんてん越中のせんし
の及三尺ふたふもて扱小本小味常と付んと打
ておと扱小本と包ひてんてんてん扱小
本手陳の早業越中しあつて扱小本福切下能
んと扱小の扱小まもいんてんてんてんてん

切落ふ本小扱おと扱せんとあの本と削る
折こそおれ不忠儀やんせの神船の天の扉を押
開き神の伝言まもいんてん扱小同おなる成小
か〜〜〜の同入軍早く和陸とのあくむ教多
の諸道員おれ扱して和陸お及ひりてん
傳とく表の戸とてんてんと和陸忘れてもあくと
起る孫お娘のあくと長きあめとん扱く〜〜

弘化五年

未年

九月言祥

中葉

滝崎長
國
正

傳

海峽

正

三河國三品吉田驛

城南中葉

本之
美濃屋内

高橋氏之務

伊豆守棟御願方

中葉
任人

泉永堂

子之月十日

卷之二

孫正清



美濃屋

茂兵衛